
泣きうさぎ。

はる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣きつさぎ。

【Nコード】

N9064Q

【作者名】

はる

【あらすじ】

ある日突然、目が覚めたら異世界だった。

しかもその世界で、私は神と同等のアイラという稀有な存在と間違われて王宮へ連れて行かれることに。

「だから私はアイラじゃないってば！」異世界トリップの恋愛ファンタジー。

第0話 序章（前書き）

あらすじ

「君に触れても、いいだろうか」

ある日突然、異世界へ飛ばされてしまった私は、何やらアイラという高貴な存在に間違われて。

その世界に住む王子や従者、騎士、色んな人たちと出会った。

「一つだけ、わがママを聞いてもらえませんか」

次第に暖かい感情が、一つずつ増えていく。

「君って不思議な子だね」

私は、泣きたくなるくらいの笑顔を知った。

「俺はいつもお前を泣かせてばかりだな…」

私は、

「君は何も分かってない。：君が僕にそうやって近付くたびに、笑うたびに、僕がどんな気持ちになるか、君は何も分かってない」

たった一度の、恋をした。

- - - - -

注意

本作品はフィクションです。

恋愛要素を重視したファンタジーとなります。

何分初心者ですので稚拙な文章、至らない点があるやもですが批判等はご容赦ください。

以上の点を踏まえた上でご理解頂けた方は本作品へお進みください。

第0話 序章

「え…」

目が覚めたらそこは知らないところだった。

なんて、どこかの物語にでも出てくるようなキャッチコピーが覚えきらない頭にぼんやりと浮かぶ。

むくりと倒れていた上体を起こして、霞んだ視界を数回瞬きするところでクリアにすると次第に意識もはつきりしてきた。

「うっ、どっ…?」

さっきまで自分の部屋で寝ていたはずなのに、ここは誰がどう見ても森で。

辺りを見渡してもそれ以外何もない。

そっか、まだ夢なんだ。

それなら納得できる。夢にしてはよたら意識がはっきりしてるな、とか、土の感触も風を感じる肌もやたらリアルだなと思わなくもないけど。

むしろ無理矢理でもそう思わないとこの状況の説明がつかないというか。

夢なら早く覚めて！と頬を痛いくらいにつねってみるけれど効果なし。

他にどうすることも出来なくて、若干焦りだした私の耳にガサリと何かが草を掻き分ける音が届いた。

その音がした方へゆつくりと視線を這わしていくと、遠くで荒い息を吐きながらこちらへジリジリと歩み寄ってくる赤い目の獣の姿が見えた。

「ひっ……！」

まるで狼のような形。

でも確実に違うのは、遠目からでも分かる程その獣は大きすぎた。

日本にも、いやどの世界にもあんな大きさの狼なんているはずがない。

「な、なに……、夢なら早く覚めてよ……！」

獲物を見つけたような赤い目にジッと見つめられて、恐怖で立ち上がれない。

全身がガタガタと震える。

夢だ夢だと言い聞かせても、この尋常じゃない悪寒が夢ではないと物語っている気がする。

瞬間。

狼に似た獣の前足が勢いよく地面を蹴ったかと思うと、凄まじいス
ピードでこちらに飛びかかってきた。

「…っ！」

ぎゅっ と目を瞑る。

死を覚悟して、両手をクロスして顔の前で身構えるけれど、しかし
予想していた痛みはいつまで待っても襲ってこなかった。

「…？」

恐る恐る目を開いて腕の隙間から前を見遣ると、見知らぬ男の背中が見えた。

「え…？」

ガウッ！

その人物が、先ほど飛びかかっていた獣を剣で食い止め弾き返すと、目にも止まらぬ速さで真つ二つに切り裂く。

途端に広がる血生臭い匂いと地面に転がる獣に顔をしかめながらも私はただ呆然とその男から視線を外せずにいた。

背中を向けている男が剣に付いた血を振り払うと、それを慣れた手つきで鞘に収める。

「…本物？」

思わず呟く。

今日にしているもの全てに頭が混乱して何が何だか分からない。

怪物みたいに大きな狼も、男の腰に携えている剣も、なにより男の格好はまるで西洋の騎士のようでもここが日本とは思えない。

「大丈夫か」

ふいに男がこちらを振り返ったかと思うと、途端にその男の切れ長の目が驚愕に見開かれた。

「アイラ様！」

「へ？」

何故ここにいるのかと慌てながら、突然男が腰を低くして屈んで、片膝だけを立ててこちらに頭を下げる。

なんていうか、騎士が主に忠誠を誓うような、そんな格好。

呼ばれた名前も状況も理解出来なくて、一瞬呆気に取られた。

目の前で頭を下げる男の、深海のような深い濃紺の髪が艶やかに日の光に反射した。

「あ、あの…とりあえず、顔上げて下さい…！」

「御意」

呼び掛けに礼儀正しく答えると、片膝をつけた格好はそのままに顔だけをこちらに向けた。

整った顔立ちの男性から真っ直ぐ見つめられるということに慣れてなくて、若干の気まずさから目を泳がせる。

ど、どうしよう。

顔上げてくださいとか言っちゃったけど、自分自身、混乱していて何をどう言ったらいいか分からない。

「えと、あの…人違いです…！」

「人違い？」

「は、はい。ごめんなさい。今すっごく混乱してて上手く言えないんですけど、私には宇佐美梓っていう名前があってですね…」

「…うさみ、あずさ」

「はい。ここが何処なのか、そもそも何で私がここにいるのかも分からないんですけど……でも、とりあえずアイ……なんとかではないことは確かです」

しどろもどろになりながら何とか説明すると、男が考えるように眉根を寄せた。

「いえ、間違いありません。その漆黒の御髪と瞳は間違いなくアイラである証です」

そうハッキリと断言する男にいいよ焦りだして、意味も分からず乾いた笑みを浮かべた。

「ちょ、ちょっと待ってください！黒髪黒目とか日本人だから当たり前だし……大体アイラって何ですか？て、ていうかこれ……夢ですよね？」

「にほんじん……？その言葉は存じませんが、夢ではございません」

いや！夢って言うて！

僅かに残っていた希望が粉々に打ち碎かれる。

「だったらここは何処なんですか？日本じゃなかったらフランス？アメリカ？」

「ここはレーデル国にございます」

そんな国聞いたことない。

世界史でそんなの習ったっけ。小さすぎて授業で扱わないとか？

「アイラ様、…失礼ながら、もしかして記憶が」

言いにくそうに男がそこで区切る。その瞳が悲痛そうな色を湛えていてどう返していいのか分からず口を閉ざした。

「とにかく、このまま森にいては危険です。アイラ様の安全確保の為に王宮までご案内致します」

無言を肯定と受け取ったのか、安心させるように今後についてそちらで話し合おうと勧めた。

確かにこのままここにいても埒があかないし、断って先ほどのような獣と遭遇しても自分の身を守る自信がなかった為、コクリと頷いた。

ん、待つて。

いま、王宮って言った？

王宮？！

第1話 似非

焦る私をよそに、男は傍らに控えていた馬に近付いてこちらに手を差し出す。

「お手を」

「あ、ありがとうございます」

初めての乗馬に若干お尻の痛みを感じつつ、男が私の後ろから抱え込むように手を伸ばし手綱を引いて馬を走らせた。

30分ほどすると生い茂った森を抜け、その先に開けた街並みが見えてくる。

例えるなら中世ヨーロッパのような建物が並んでいて、その奥の小高い丘にはいかにも王宮というような立派な建物が建っていた。

聞かなくても確実に私は今そこに向かっているわけで。

私がアイラと呼ばれる者に勘違いされている為、なにやら丁重に扱われているけれど、王宮に行き、そこで私がアイラではないと気付かれてしまったら一体自分はどうなるのだろう。

そのまま放り出されて行く宛のない私はまさかのホームレス状態？

そのまま餓死して誰にも気付かれずご臨終なパターン？

「無理無理無理っ」

ぞっと思わず身震いすると、不安そうな私に男が大丈夫ですと後ろから口を開く。

大丈夫って、それは私がアイラだった場合の大丈夫なんだろうな…

王宮へ向かうまでの間、男は申し遅れましたとすまなそうに自分の名を口にした。

「ギルバート、さん」

「はい。ギルバート・センチスと申します。私のことはどうぞギルとお呼びください」

皆そう呼びます、と付け加える。

チラリと後ろを振り返れば、切れ長の目とかち合って勢いよく前を向き直した。

「よよ呼び捨てなんて出来ません…！」

どう見ても彼は23、4の年齢で、私なんて20にも満たない18の学生なのに馴れ馴れしく呼べるわけがない。

それに最初私を見たときの驚愕の表情以外は、取り乱したりせずクールで硬派な印象の彼に若干の緊張もあった。

でも、ふと思ったけれど、どうして見るからに外人の顔立ちをした彼と言葉が通じるんだろう。

そう思った次の瞬間、考えるのを諦めた。

駄目だ、きりがない。

それを考え出したら何で自分がここにいるのかだって説明がつかない。

ただ分かるのは、ここが日本じゃないってこと。

信じたくないけど夢ではないらしいこと。

ぼやんと頭の中に、異世界という単語が浮かんできて、それを無理矢理消し去る。

「ありえない」

「え？」

「あ、な、なんでもないです！…それよりギルバートさんのことをギルと呼ぶなら、私のことも呼び捨てにしてください」

「それはなりません。私のような者が呼び捨てなど」

眉をしかめて断られる。

「じゃ、じゃあせめてアイラじゃなくて梓って呼んでくれませんか？」

「…アズサ様？」

「様…うーん、とりあえずそれでもいいか」

様なんて落ち着かないけれど、アイラよりましだろうと何とか納得する。

馬で街並みを闊歩していく間、ギル（そう言わないと返事をしてくれない）にこの国のことを教えてもらった。

レーデル国は商業が盛んな比較的平和な国で、大陸の大半をこの国が治めているらしいこと。

先ほどまでいた森は国の中でも危険な場所で、巨大な獣が生息しており人間を襲うことも少なくないらしいこと。

ギルは王宮の直属の騎士で、とにかくなんか凄い人だったこと。

丁寧に説明してくれたはずなのに、弱い私の頭では上手く理解出来なくて、覚えられたのはとりあえずそれだけだった。

「ねえ、ギル」

街並みを見渡しながら、先ほどから多くの視線を感じて、声を潜めてギルを呼ぶ。

「はい」

「なんか街の人たちが私のこと見てるんだけど…私、どこかおかしいのかな」

日本人が珍しいとか？

俯きながらチラリと視線を街の人たちに向けると、ひどく驚いたような、信じられないものを見たような目をしている。

しかもその後、決まって全員が地面に跪いて、こちらに向けて祈るように両手を合わせていた。

それは、まるで神を崇める行為のように感じられた。

「無理ありません。こうしてアイラ様にお目にかかれて皆喜んでいのです。悪気はないので許してやってください」

目が合うと途端に涙を浮かべる老婆を見て、ぎよっとする。

許すもなにも居たたまれないだけで怒ってはないのだけれど、街の人たちの行為は本来なら私に向けられるはずのないもので、なんというか申し訳ない。

「…そもそも、アイラって何なんですか？」

ツリと呟いたそれに、私が記憶をなくしたと思っているギルは何ら戸惑いなく答えた。

「アズサ様のように御髪と瞳が漆黒の方を総称してアイラとお呼びしております。その存在は王と同等、もしくはそれ以上の神の子であるとも言われております」

「な…」

神の子って！

もしかしなくても私はとんでもない者と勘違いされているらしい。

日本人だったら染めてない限り当たり前に黒髪黒目なのに。だってこの国の人たちが日本に来たらびっくりして腰を抜かすんじゃないだろうか。

「でもどうして黒髪黒目がそんな王と同等とか、ましてやそれ以上だなんて…」

「漆黒の御髪と瞳を持つ方は数百年に一度しかお生まれにならない稀有な存在なのです。そしてその方の加護を受けた国は富も名誉も何でも我が物に出来ると言い伝えられております」

やばい。

なんかやばい。

「しかしその言い伝えよりも、アイラと呼ばれる方の存在が人々の希望、生き甲斐となるのです。私も、まさか生きている内にお目にかかれるとは思いませんでした」

「はは、すごいですね…」

「はい。本来ならば私がこうして触れて良いお方ではないのです」

今回は急な事で申し訳ありませんと丁寧に頭を下げられる。

到底我が身とかけ離れた話を聞きながら、冷汗がダラダラと背中を伝っていく。

私が神の子であるわけがない。

それはもう確実に。

よく考えたら、これってアイラという崇高な者に偽り騙したとして死刑になってもおかしくないことをしでかしているんじゃない？

「あ、あの、私やっぱりここで降ります…！」

ちょっと急用が出来ちゃって、てへ！

なんて嘘バレバレな文句を吐いて馬の進行を止めさせようとしたけれどギルがそうはさせなかった。

死刑になるくらいなら、まだホームレスになった方が助かる希望があるのに…！

「なりません。アイラという存在は非常に大きすぎて、それを利用しようと良からぬことを考える輩もいます故、一人での行動は危険

すぎます。…今までどうして無事だったのか不思議なくらいです」

心底不思議そうに深い息を吐くギルに、何とか降ろしてもらえように必死に考えを巡らせる。

えーい、この際本当のことを言ってしまえ！

「だ、だって私…、ぶっちゃけるとアイラじゃないんです！そんな立派なものじゃ……ただの高校生で、ついさっきまで自分の部屋で寝てたはずなのに、それがいきなり目が覚めたら知らない場所にいて……ほんとなんです、アイラじゃないんです！」

だからお願い見逃して！と一気に捲し立てると、ギルが難しい顔をして言葉の意味を理解しかねていた。

なんだろう。

なんていうかこう、頭の弱い子を見つめるような眼差し。

「…記憶を失われて混乱されているのかもしれませんが。少々喋りすぎたようです、申し訳ありません」

「え、あの、ちょ」

結局それからギルに何を言っても、私がアイラではないという言い分は聞き入れてもらえず、ただひたすらに王宮を目指して馬を走らせ続けた。

第2話 方法

王宮に着くと、遠目から見たときよりも何倍も迫力のある城に目を奪われた。

馬を降りてギルが門番に何やら話をする、その門番がこちらに視線を寄越した途端すぐさま跪いて頭を下げる。

駄目だ。

誰も私がアイラじゃないと疑う者がいない。

重々しい厳重な門扉が開き、そのままギルに導かれるまま豪華すぎる長い廊下を進むと奥の部屋へと通された。

きゅっと握りしめた手のひらが強張る。

「アズサ様、こちらへ」

ギルの声で部屋へと足を踏み入れると、真っ赤な絨毯に続く先にこれまた豪華な椅子に腰を掛けている人物が見えた。

「国王陛下、アイラ様をお連れして参りました」

恭しく腰を下ろし忠誠の姿勢をとるギルに、どうしたものかと焦って同じような体勢をとった。

「これはこれは…」

国王陛下と呼ばれた年配の男性が驚いたように目を見開く。

隣には后であろう女性が、アイラという存在に魅了されたように吐息を漏らす。

2人のすぐ傍らには、ギルと同じくらいの年齢の青年もあり、じつと食い入るような視線を感じた。

「失礼ながら、名は何と申すか」

「へ？」

ふいに国王から声を投げ掛けられ、すっとんきょうな声が出る。

「う、宇佐美梓と申します…！」

「あずさ殿。私はガサール・アルファイアと申す。この一国の王である故、頭を下げられぬ立場であることをお許し願いたい」

「い、いえそんな！とんでもない！」

ただの高校生に頭を下げるお偉いさんなんて考えられない。

「だからどうかアズサ殿も腰を上げては頂けないだろうか。神の子である貴女にそのようなことをさせているとなると天罰が下ってしまいます」

私をアイラだと信じきっている国王はそう言って微笑む。

まずい。非常にまずい。

今ここで私がアイラではないと公言すれば、穏やかな国王陛下たちの顔はみるみる険しくなり何らかの処罰を宣告するだろうか。

考えて、身体が小刻みに震え出すのを隣にいたギルがいち早く気づき口を開いた。

「国王陛下、アズサ様はどうやら記憶を失われているようで混乱しておられる故、私から説明させていただいても宜しいでしょうか」

「……！なんと、そうであったか。それは申し訳なかった。記憶がな

いとはさぞかし不安でありましょう」

劣る目を私に向けたあと、ギルに私と出会ってからのことを説明するよう促す。

話終わると国王は目を閉じて何やら考え込み、後にいたっては目を潤ませていた。

ふと、国王たちの傍らにいる人物と目が合う。

国王たちと並んでいるということは、彼は王子という立場になるのだろうか。

蜂蜜色の綺麗な髪に空色の涼しげな瞳は、まさに絵本から飛び出したような代表的な王子様像で。

ひどく整った顔立ちで、しなやかな身体付きをしている。

「きっと記憶を失ってしまうほどの酷い目に合わされたのだわ。今までどこかに幽閉されていたのかもしれませんが…」

后があらゆる想像をしては、手元のハンカチを潤んだ目元に押し当てている。

後の言葉に国王が力強く頷いて、しばし思案すると表情を和らげて口を開いた。

「うむ。…アズサ殿。これからは何の心配もいりません。我がレーデル国の持つ総ての力で貴女の身を保護いたしましょう」

「…え？」

ぽかんと口を開く。

いつの間にか震えは止まっていた。

「あ、あの…」

「ん？ああ… もしやアイラの言い伝えにある力を利用しようとしているのではないのかと不安に思われているので？」

「違いますっ、そうじゃなくて…」

そもそもそんな力などないのだから、頼まれたところで無理な話なのだけれど。

「心配には及びませんぞ。アズサ殿は、ここでごゆるりと生活していただくだけで構いません。記憶がないのであれば、ここを我が家だと感じてもらえばいいかと」

無条件の受け入れの眼差しに、じわじわと罪悪感のようなものが胸を打つ。

「あの…国王陛下は疑わないのですか？その、私が本当に…アイラなのかを」

蚊の鳴くような声でそれだけを呟くと、国王と后が顔を見合せ、ややあつて2人同時に吹き出して笑った。

「そのお姿を見て何を疑いましょう。貴女は紛れもなくアイラであられますぞ」

その国王の言葉に誰も否定する者はなく、むしろ皆が当然だという眼差しを向けた。

しばらく周囲の視線を受け止めて、ああもつこれは駄目だなと頭の隅で悟る。

きつと何を言ったところで、彼らにとって黒髪黒目イコール、アイラなのだろう。

疑われて殺される以前の問題だ。

「はあ」

諦めにも似た声が出る。

よく考えれば、どのみち帰るところなんてないし、今うだうだ考えてもどうにもならないなら、せめて帰る方法を見つけたほうがいいんじゃないだろうか。

…うん。

なんか自分で言って自分で納得した。

助かる方法は1つしかない。

アイラじゃないってバレる前に帰る方法を探すこと。それだけだ。

第3話 立場（前書き）

私、宇佐美梓は世間一般的にみて何もかもが平均的というか。

身長155センチで髪は鎖骨よりやや下まであるストレート。

制服のスカート丈は長すぎず短すぎず、先生に怒られない程度の無難な長さ

今まで告白されたことがないわけではないけれど、だからと言ってモテるわけでもなく

学校の成績だって、クラスの平均あたりをうろろろしているし

とにかく、何においても普通という言葉が似合うのが私である。

そんな私が、目が覚めたら異世界でしたーなんて、本当ありえない！

第3話 立場

それから私は結局腹をくくってアイラと偽りここでしばらくお世話になることに決めた。

やっぱり野宿よりベッドがあつた方がいいに決まってるし。

国王陛下が、それは良かったと微笑みながら傍らにいた自分の息子に目配せをする。

それを受け止めた彼が頷いてこちらに近付くと、片膝を地面につけて私の右手にそつと触れた。

「レーデル国第一王子フェイス・アルファイアと申します。以後お見知り置きを」

触れた手をそのまま持ち上げて、私の手の甲にそつと口付けた。

「よ、よろしく願います」

ぎゃー！

下から見上げられてドキリとする。

まるでお姫様にするような行為。

どもりながら答えると、王子が少しだけ意地悪そうに笑って口端を上げた。

うつ、絵になるな…

「そうだ。この方に使っていただく部屋の案内、僕がしてもよろしいですか？」

思い付いたように立ち上がりながら国王に問いかける王子に、国王はすぐさま頷いた。

「おおそつだな。お互いを知るにもそれがいいだろう。…ギルバートもご苦労であったな、もう戻ってよいぞ」

「御意」

国王が私の斜め後ろにいたギルに視線を移してそう言つと、ギルが一礼して出ていこうとする。

「ギル」

思わずさがるように、ギルの袖をきゅっと掴んで呼び止めた。

この世界に来て初めて出会ったのがギルで、あの大きな獣から命を助けてくれた上にここまで連れてきてくれた。

いつの間にかそれが私にとって救世主のような、無条件に頼れる存在になっていた。

ギルがいなくなると思つと寂しくなる。

「アズサ様？」

「…また後で、すぐ会えるよね？」

不安そうな目を向ける私に、ギルは相変わらずクールで真面目な表情のまま。

「同じ城内にいますので、必要とあればいつでも」

私を見つめるギルの目は、主従関係をハッキリと分けた敬いのこもったそれでシュンとする。

思わず敬語じゃなくなってる私にもギルは咎めない。

「では行きましょうか」

ギルが一礼して出ていった扉をじっと見つめたままボーっとしていた私に王子がそう声をかけた。

第4話 新参

案内された部屋を見渡して、本当にここは日本じゃないんだと改めて実感する。

「どうかしましたか？」

「いえ、なんか…すごすぎて」

私が案内されたのは、両開きの嚴重なドアから入った部屋の奥に広大なテラスの付いた二階の部屋で、私の狭い部屋が何十個入るか検討もつかないくらい、とにかく広い。

右側の奥にはシルクの天蓋がついた、憧れのお姫様ベッド。

左側は脚の細いデザイン性抜群のテーブルと椅子。

白を基調とした部屋自体に物はあまりなく、遊びのスペースがほとんどだった。

傍らには数名の侍女が控えている。

「あの…もっと普通の部屋はないですか？」

「お気に召されませんか？」

「そ、そうじゃなくて、寝るスペースさえあればいいんですけど」

私の部屋もそのくらいだし。

優遇すぎて恐縮する私に、王子は目を見張る。

「何を言っんです。それじゃあ馬小屋です」

王子にとって私の部屋の広さは馬小屋レベルらしい。

「あ、そうだ。それより王子、私なんかに敬語なんて使わないでください。私のこともアズサと呼び捨てにしてください」

王子の家である王宮に住まわせてもらう居候の身であるのに何様だ

って感じだし…と考えると、王子にすごい凝視された。

それから王子が何やら思案したあと、先ほどの挨拶のような少しだけ意地悪な笑みを浮かべる。

「なら僕のことともフェイススとお呼びください。貴女が同じ条件をのむなら、そうしましょう」

「うっ…」

私は生まれてこのかた王子に会ったのは初めてだけど、それが失礼だってことくらい分かる。

「そんなに難しい条件でしたか？…なら、これから親しくなりたいという意味を込めて、フェイススとお呼びください」

王子に綺麗な笑みでそう言われ完敗を認めると、澁々分かりましたと口にした。

それでは早速、一言断りを入れてから王子、いやフェイススがくだけた口調に変わる。

「ずっと気になっていたんだけど、アズサの格好ってアイラの正装なのかな？…ずいぶん不思議な格好だけど」

「え？」

見下ろせば、少し泥に汚れたピンクチェックのパジャマを着ている。

寝ている間にこの世界に飛ばされたからだ。

寝間着姿が恥ずかしくてブンブンと首を振ると、フェイススが、そう、と呟いて傍らに控えていた待女をこちらに呼んだ。

「とりあえず汚れているようだから着替えた方がいいね。…サラ、頼んでいいかな」

「はい」

サラと呼ばれた待女が恭しく私とフェイススにお辞儀をすると、サラさんが私に目を向ける。

「これからアイラ様の身の回りのお世話をさせて頂くサラと申します。一生のうちに、まさかアイラ様にお会い出来るなんて思いませんでした。お世話をさせて頂くこと、至極光栄にございます」

私より腰を低くしながら話す、ひどく緊張した面持ちのサラさんの両肩に慌てて手を添える。

「そ、そんな、私こそお世話になるので止めてください…！私の方が頭を下げないといけないのに」

よろしく願いしますとペコリとお辞儀をすると、今度はサラさんが慌てだす。

「なりません！一介の侍女にそのようなこと…！」

「いえ、色々とお世話になるんだから当たり前です！…あ、あと私のこともアズサと呼んでください」

「なっ…！高貴な方呼び捨てにするなど滅相もございません」

「でも居候させて頂く私は、いわば新参者です！サラさんの方が先輩なので、」

「ア、アイラ様！」

「…ぶっ」

ワタワタと言いつつ私たちに、ずっと傍観していたフェイススが堪えきれず吹き出した。

「…君って変わってるね」

口許に手をあてながらクスクスと笑うフェイススに目を向ける。

「え？私のこと？」

「うん。神にも等しいアイラである存在なのに、それを全然鼻にかけないというか、むしろ低姿勢すぎるところが。」

「……だって。お世話になるんだもん、当たり前でしょ？」

例え自分が本当にアイラだとしても驕った態度なんてとりたくない。うちのお祖母ちゃんだって親しき仲にも礼儀ありって言うてたし！

「……あれ、私なにかおかしいこと言うて、る？」

面白そうなものを見るような目をしたフェイスと、何やら涙を浮かべているサラさんを交互に見遣って、2人から返事がないことに首を傾げる。

恐る恐る口を開くと、フェイスが笑って首を横に振った。

だよね間違ったこと言うてないもんね。

「じゃあ改めましてサラさん、よろしくお願いします!」

ぎゅっとサラさんの手を握りしめて満面の笑みを向けると、サラさんがその手を尋常じゃないほど見開いた目で見つめる。

「も、勿体ないお言葉です…」

「わ、サラさん!」

触れられたことにより、緊張でガクガクと震えだしながらそのままサラさんは地面によろめいてしまった。

「サラさん!しっかりしてください!」

肩をゆさぶって呼びかけても、返ってきたのは、うつ、と呻る声だけ。

「サラさん!」

こんなんでこの先大丈夫かな、とか思った私はきっと間違いじゃない、はず。

第5話 蜂蜜

それからなんとか平静を取り戻したサラさんに着替えを用意してもらったけど。

「わー自分で着れます！」

「いえ、お手伝いさせていただきます！」

自分で着れると言ったのにサラさんは断固として譲らず、結局あれよあれよという間に着替えさせられてしまった。

薄い水色のストレートの髪を腰の位置まで伸ばしたグレーの瞳をしたサラさんは、一見儚そうに見えるのに喋ると頑固でちょっとびっくり。

着替えを済ますまで席を外していたフェイスが部屋に戻ってくる
と、私の姿を捉えるなり軽く目を見開いた。

「似合うね」

え、と戸惑いながら自分の姿を見下ろす。

手触りの良い素材で作られたドレスは、私の髪と瞳を際立たせるかのような純白で、襟元や袖や裾に、さり気なく刺繍とレースが施されている。

ドレスなんて着たことない私には何だかこそばゆくて恥ずかしい。

「ほ、ほんとに？」

「うん、ほんとに。綺麗だよ」

私に近付いてニコリと笑いながらそう言うフェイススは、さすが王子。

女性を喜ばせるのが上手いというか。

お世辞と分かっているながらも、その言葉に顔を赤らめてフェイススからフィと顔を逸らした。

私の反応をからかうように口端をつり上げながらフェイスが顔を覗き込んでくる。

「あれ、照れてる？」

「…っもう！」

意地悪な目とかち合って軽く睨むと、反省した様子も見せずに「いめんごめん」と笑う。

「そうだ、夕食までまだ時間あるし、城内を回ってみる？」

膨れっ面の私を宥めるかのようにそう提案を持ちかけてくる。

「うん！見てみたい！」

広い王宮の造りに興味があつた私は機嫌を取り戻してすぐさま頷いた。

それからフェイスと共に部屋を出て、城内を大まかに説明してもらつた。

天井までビッシリと本が並ぶありえないくらい広い書庫。

舞踏会が出来そうなほど豪華な大広間。

大理石が敷き詰められた浴場。浴槽の傍らから滝まで流れている豪華ぶりだ。

他にも厨房やら騎士達の鍛練場やら様々なところに連れて行つてもらつたけど、その都度出会う人たちからの崇高なものを見るような目にドギマギしてしまつた。

「わーつかれたー！」

城内があまりにも広すぎて、最後に案内してもらった中庭の芝生の上にボスンと腰を下ろした。

「まだ全部案内しきれてないんだけどね」

「え、まだあるの！」

笑いながら私の隣に座るフェイスに驚きの声をあげる。

「私一人で出歩けないかも」

不安そうに呟く私に、クスクス笑いながら、すぐ慣れるよと口にする。

ふと、目の端にサラリと輝いたものが映った。

気になって顔をそちらに向けると、フェイススの綺麗な金色の髪が沈みかけの陽の光に反射してキラリと艶やかに光っていた。

「綺麗…」

思わず口にして、指先は自然とフェイススの金色の髪を一束すくった。

「そう?」

抵抗せず、されるがままのフェイススが私に視線を向ける。

澄んだ青の瞳とよく似合う、綺麗な髪。

「うん、蜂蜜みたい」

おいしそう、と付け加える。

艶やかな金色が蜂蜜みたいで甘そうだと思った。

「…初めて言われたな」

「あ、ごめん。変な例えで」

きつと王子であるフェイスなら、色んな人から宝石みたいだとか、もつと高価で、きらびやかな上手い褒め言葉をもらうんだろかなと思ったら申し訳ない。

「いや、嬉しいよ」

「そ、そう？」

「うん、…蜂蜜かぁ。甘そうだね」

「へへ、それちょっと思った」

甘いもの大好きな私はそれを想像すると、クウと小さくお腹の虫が鳴った。

「あ」

恥ずかしくてお腹を押さえると、フェイススが意地悪な顔で笑う。

「甘そうだからって食べちゃ駄目だよ」

「た、食べないよ!」

「ははっ」

ポカリとフェイススの肩を叩く。

フェイススって見た目はすごく、いかにも王子様だし体つきもスラ

ツとした、しなやかな体型で優しそうな雰囲気なのに、なんか時々いじわる。

しかも膨れっ面の私を見て楽しんでるんだから、尚更たちが悪いというか。

「じゃあアズサが空腹で倒れないうちに戻ろう。そろそろ夕食の間だ」

笑いながらフェイススが立ち上がって、こちらに手を差し伸べてくる。

キラリと光る蜂蜜色の髪がフェイススの顔に影を落とす。

それがまた絵になっていて、不覚にもドキリとした私は文句の一つも言えずに、その手を掴んで立ち上がった。

第6話 不安

夕食は今まで食べたことがないくらい豪勢で、頬が落ちそうなほど美味しかった。

感動する私に、終始穏やかな目を向ける国王陛下やお姫様はすつこく良い人だし、お世話をしてくれるサラさんともだいぶ打ち解けてきたと思う。

勝手に友達が出来たみたいに嬉しくなった私に、サラさんは仕事となると相変わらず頑固で、あくまでも主従関係であろうとするけど。

「アズサ様と私なんかがお友達だなんてそんな……天罰が下ってしまいます！」

とか言っつて。

夜になり、天蓋ベッドに滑り込むようにして入ると、急に体の疲れがどっと押し寄せてきた。

今日1日で色んなことがあったから無理もない。

ベッドで大の字になってボーとしながら今日のことを振り返る。

何でだか分からないけど気付いたら森の中にいて、獣に襲われそうになったところをギルに助けられて

アイラという神にも等しい存在に間違われたと思ったら、王宮に連れて行かれてそこで私の身の保護をしてくれる、なんて夢のようなまるで信じられない話だけ。

「…騙してるんだよなあ」

ポツリと呟く。

バレたら殺されるとか最悪な状況を想像していたけど、今はそれよりも申し訳なさが先に立つ。

私が嘘をついているということ。

ここの人たちが、みんな優しい人たちばかりだって知ったから胸が痛い。

だけど、どうやらここが異世界だということを否定できないようにだし、元いた世界へ帰る方法を見つけるためにバレるわけにいかないのも事実。

考えだすと、不安ばかりが胸を襲ってくる。

体は疲れてるはずなのに、なかなか眠れなくてガバリと起き上がった。

テラスに繋がるガラス製のドアを開いて外へ出ると、ひゅうと冷たい風が体を掠める。

「さむ…」

両腕を抱きしめながら手摺まで近付くと、新鮮な空気にモヤモヤしていた頭がすっきりしてくる。

頭上では、地球では絶対見ることの出来ない2つの月が浮かんでいた。

黄色の月と赤色の月。

「あれ、」

何気なく、テラスの下を見遣ると、暗闇に溶け込みそうな深海の髪の色をした人物が立っていた。

「ギル？」

呟くと、その人物がこちらを見上げる。

「アズサ様」

「そんなところで何してるの？」

まさか私がいるとは思わなかったのか、クールな表情を少しだけ崩したギルに声をかける。

一応夜も遅いから、遠慮がちに。

「俺は今日の夜間警備の担当がここなので」

「わ、大変だね。…眠くないの？」

手すりに両腕を乗せて、その上に顎を置いた状態でギルを見下ろす。

サラさんもそうだけど、ギルとかいつになったら休めるんだろう。

お休みの日とかあるのかな。

「大丈夫です。それよりアズサ様はどうされたんですか」

「…うん」

「……眠れないんですか」

ギルの低温の落ち着いた声が静かな空間に響いて溶ける。

「うん、何か色々考えてたら目が覚めちゃって」

笑う私に、ギルは思案するように一呼吸おく。

辺りは暗闇で、ほんの少ししか明かりが灯されていないから、目を凝らさないとギルが今どんな表情をしているのか分からない。

「アズサ様」

「ん？」

ややあつて投げ掛けられた言葉。

「……ここは、良いところですよ。何より食べ物が美味しい」

「……え？」

「人々は皆、暖かくて気さくな人達ばかりで、街も活気に溢れてます」

「ギル……」

「アズサ様も、きっとすぐにこの国を気に入ると思います」

「……」

「心配ありません」

最初は、何の脈絡もない言葉だと思った。

けれど、ギルの言葉が、不安な私の心を見透かして安心させるためのものだと思い付いて、じわじわと胸が温かくなる。

ギルって、あまり表情が変わらないし落ち着いた声をしているから、一見怒っているのかなと勘違いされてしまいそうなのがあるが、そううだけ。なんだかギルが言う言葉は嘘がない気がするというか。

「…そっか」

ぼつりと呟いて、ゆっくりと目を閉じる。

ギルの言葉が、すんと胸の奥に落ちた。

正直、不安はたくさんある。

もしこのまま元いた世界に帰れなかったら。

家族も友達もみんな私のことなんて忘れて、私がいけないことが当たり前になって。

もしかしたら、もう元いた世界では私の存在自体、最初からなかったことにされているかもしれない。

そう思うと、たまらなく不安になる。

帰る場所なんてあるのかな。

宇佐美梓、という人間を知る人が誰もいなくて、このまま一人ぼっちになってしまったら。

ものすごく、怖い。

「ギル」

「はい」

「…早く、ここに馴染めたらいいな」

「はい」

「みんなと、…仲良くなれたらいいな」

「はい」

両腕に顔を埋めて話す言葉は、ギルには聞き取りにくいと思つのに、律儀に返してくれる低音の声。

それを聞いていると、不思議と落ち着く。

私はまだ一人ぼっちなんかじゃないって、こつやつて話しかけたら、ちゃんと返してくれる人がいるって思える。

「…ありがとう、ギル」

私は、私に出来ることから始めたらいいのかな。

もっともつとこの世界のことや皆のことを知って。

不安になるだけじゃなくて、たくさん好きになれるように。

第6話 不安（後書き）

はじめまして、はるです！

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます！

感謝感謝*

第7話 悶々

- - - - -

「幸せはく歩いてこないっ、だくから歩いて行くんだねー」

部屋の前の広すぎる廊下で一人、あの有名な歌を口ずさみながら前足を踏み出す。

75

「一日一歩、三日で三歩、さーんぽ歩いて二歩下がるっ」

「アズサ様、何をやられてるのですか？」

実際に歌にならって歩き終えると後ろから声がかかった。

「サラさん！」

朝食を乗せたカートを止めてこちらを見ながら首を傾げているところを、私は迷わずズンズンと進んでサラさんの手を掴んだ。

サラさんが分かりやすいくらいビクリと驚くのに対して、私は満面の笑みで。

「今日こそは一緒にご飯食べましょう！」

私が異世界へ来てから、一週間が経っていた。

最初はサラさんが持って来てくれる料理も、自分で持ってくる！むしろみんなと一緒に食べましょう！と提案するも

私の仕事を奪うつもりですか！と泣きながら断固反対された為、大人しく部屋で待つしか出来なかった。

けど。

それに大人しくする私は一日で終わった。

朝早くから厨房で待ち伏せしてみたり、サラさんの背後から強引にカートを奪ってみたり。

仕事を奪われると泣かれてしまえば何も言い返せなくて結局失敗に終わるけれど、それが駄目ならせめて一緒にご飯を食べてもらおう、というか。

いつも私が食べるのをサラさんは傍らに立ってじっと待機しているのがいたたまれない、というか。

一緒にいるのだから一緒にご飯を食べるのは当たり前でしょう。

「なりません！身分の違う者が同じテーブルで食事など考えられません」

「でもさ、サラさんだってお腹空いてるでしょうっ」

「いえ、そのようなことは」

ぐきゅるきゅる

どこからともなく情けない音が聞こえる

「……そのようなことは？」

「……ありません」

コホンと一つ咳払いをして気まずそうにそう言う。

私はテーブルに並べられた料理をお行儀悪くフォークでつつきながら呟いた。

「一人で食べるの、寂しいな……」

サラさんの顔をチラリと見遣り、例えるなら捨てられた犬のような視線を送る。

サラさんは、うっと言葉に詰まって明後日の方向を見た。

「な、なりません……」

むむ、手強い。

確かにサラさんの言い分も分かるし、（エセ）アイラという（エセ）高貴な存在であれば恐縮しちゃうだろうけど、けど！

なんていうかさ、ここ一瞬間、この部屋から出なくても生活出来ちゃうくらい至れり尽くせりすぎて、このままじゃ確実に怠け者になる！

それでぶくぶくと太って一人じゃ歩けなくなって…とにかく最悪なことになっちゃう。

まだ一週間なのに下っ腹だって。

ぎゅっと下っ腹をつまんで、すくすくと育ってきたそれに溜息をついた。

「…はあ」

「も、申し訳ありません、アズサ様」

私が断られたことに対して怒っていると勘違いしたのかサラさんが頭を下げる。

「いえいえ、それに溜息をついたわけじゃなくて…！」

「私、元々生まれ自体裕福ではなくて、こうして王宮で住み込みで働かせて頂けることが奇跡みたいなことで…」

「サラさん、あの」

「…なので、アズサ様がこんな私と一緒に食事をと気にかけてくださっただけでもう、」

「だからその、サラさん？」

「こんな幸せってないです！」

ぎゃー！

なんかすっごくキラキラした目で見つめられてる…！

違う違うなんか違う。

そんな風に感激してもらいたいわけじゃなくて、サラさんが一緒に
ご飯食べてくれたら、そのままの流れでもしかしたら友達になっ
てくれるかなとかガールズトークなんて出来るかなとか。

サラさんの仕事だって手伝わせてくれるかなとか思っちゃったわけ
で。

居候させてもらってるんだから、私にも何か仕事させてもらえない
かなとか考えちゃったわけで。

違うの…！

じっとしてるのが嫌なだけなの…！

たえられない！

「アズサ様、でしたら王子と一緒に食事されてはいいかでしょう」

「フェイスと？」

悶々とする私に、提案の声がかかる。

確かにこの一週間、フェイスは忙しそうにしてたから中々話せてない。

ギルとは時々出会うけど主従関係をキッチリと守ってくるし。

誰かと会う機会も少なく、それに対してちょっと寂しいなーと思っていたからいい機会かもしれない。

それに、フェイスに頼めば何か仕事をさせてもらえるかも！

働かざるもの食うべからずだ！

「そっか、そうしてみる！ありがとっサニちゃん」

第8話 側近

「うん、いいんじゃない？」

朝食を終えて、早速フェイススのいる執務室へ向かい私にも何か仕事をさせて！と頼んだところ即行でそう返された。

私の中で優先順位が、「一緒に食事く仕事をもらう」だったため、第一声がそれだった。

フェイススは少し休憩とばかりに椅子の背に凭れ掛かりながらニコリ笑う。

「え！ほんとに！」

「うん、アズサの頼み込んでくる顔があまりにも必死だったからね」

「うそ、そんな顔してた？」

両手で頬を覆いながら見上げる。

そういえば、お願い！と頭を下げる前に見たフェイスは少し驚いてた気がしないでもない。

「でもどうしてそんな事を？」

「だって居候させてもらってる私が何もしないっていうのは申し訳ないというか、落ち着かなくて」

「はは、そんなこと気にしてたんだ？でも逆にアズサに仕事をしてもらうとなると、使用人たちが落ち着かないんじゃないかな」

背凭れから体を起こして机に肘をついてそう言うフェイスにグツと押し黙る。

サラさんを筆頭に私が何か手伝おうとする度到大騒ぎになることを経験してきた私に否定の言葉は出なかった。

小さな頃、お姫様みたいな優雅な生活に憧れたことはあった。

でも実際私はごくありふれた一般家庭で育って。

お父さんは普通のサラリーマン、お母さんはスーパーのパートをしていて、弟は高校一年生の思春期ってやつだ。

自分で食べた食器はちゃんと片付けるとか学校へ行く前にゴミ出しを手伝うとか、家の手伝いには割りと厳しかった親のもとで育った私が、今更のんびりしたらだら生活するのは、どうにもむずかしい。

「ね、ルイスはどう思う？」

フェイススが背後を見遣り、傍らに控えていた男の人に声をかける。

私が部屋に入った時から一言も喋らずジッとしていた男の人。側近の人なのかな、ものすごく背が高い。

「アイラであるお方に使用人の真似事をさせるのはいかなものかと」

「…相変わらず厳しいね」

物怖じせずハッキリとそう口にする男の人にフェイスは気にした風もなく笑う。

不意に、ルイスと呼ばれた男の人の長めの前髪の間隙から目が合っ
て思わず姿勢をピンと張った。

な、なんか緊張。

やっぱり駄目なのかな。

「まあ、本当はルイスの意見が正論なんだろうけど、僕はいいと思うよ?」

「ほ、ほんと?」

「うん、おもしろそうだしね」

肘をついた手に顎を乗せて笑うフェイススの言葉に、ん?と一瞬疑問がよぎる。

「…おもしろそう?」

「おもしろそう」

なんだろう。

ほんのりフェイスの背後からブラックなオーラが見える。

目をゴシゴシ擦ってもう一度見ても、ニッコリ笑顔の後ろにブラックなオーラ。

と、とりあえず公認で仕事をさせてもらえるんだから気にしないで
おこつ。

「ルイスもいいよね？」

「フェイス様がそう決定されたのであれば」

「うん、じゃあ侍女長に話を通しておいでくれるかな」

「承知致しました」

話が進められていく中で、私は気付かれないようにルイスさんをチラリと見ていた。

銀色にも似たグレーの髪にフチなしの眼鏡と黒の燕尾服。
あまり抑揚のない話し方は、少しだけその人を冷たい印象にする。

遠慮がちに見ていたはずなのに、ルイスさんがこちらに気付いて私はハッと目を逸らした。

今の私、あからさますぎてちょっと態度悪かったかな。

「そうだ、アズサ。明日から一緒に食事しようか」

「え？」

ルイスさんと話し終えたようで、フェイスの体がこちらに向き直る。

一緒に食事したいということもお願いしようと思っていたから、フェイスの口からそれを言われて軽く目を見開いた。

「前にサラにアズサの様子を聞いたとき、一人の食事が寂しそうだって言ってたから」

「サラさんが…」

「うん、執務に追われてるときは難しいかもしれないけど。どうかな」

今日冗談のように一人の食事は寂しいなって言ったけど、半分は本当の気持ちで。

サラさんは前からそんな私に気付いてたのかと思うと胸がじわじわと温かくなる。

「うん、嬉しい！」

満面の笑みでそう答えると、フェイススは優しく目を細めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9064q/>

泣きうさぎ。

2011年3月6日22時38分発行